

新潟県小学校校長会

校長会報

題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校校長会広報部
新潟市中央区万代1-3-30
万代シテイホテルビル3階
TEL 025-290-2231
FAX 025-245-6060
E-mail: nksjko@niigata-inet.or.jp
印刷所 株式会社 文久堂



新潟県小学校校長会 副会長 佐藤 人志

「差」の解消に向けて

新型コロナウイルス感染症対策を講じながらの学校経営が続いています。各学校では、感染状況の推移を注視しながら、工夫と改善を行い、学びを止めない教育活動が展開されています。

また、GIGAスクール構想の元年と言える今年度は、端末の活用方法、情報モラル教育の推進、端末の持ち帰り、オンライン授業等、学校での対応が進んでいます。

このGIGAスクール構想の話題になると、「市町村間格差」や「学校間格差」等の「差」が取り上げられます。十月に開催された全連小調査研究担当者連絡協議会においても、「差」についての情報交換がなされました。GIGAスクール構想は、どの地域であろうとも、同じ条件整備のもとで推進される必要があり、「差」を解消しなければならぬことが課題であると認識しています。校長会として、行政等へ

の働き掛けや情報共有を継続しながら、「差」の解消に努めていかなければなりません。

一方で、校内に目を向けると、職員間で共通理解を図ったはずなのに……ということはないでしょうか。職員の受け止め方や認識の「差」が、目の前の子どもたちの姿に表れることがあります。校長の職務として、チーム学校のために職員の個性や資質・能力が発揮されるよう、組織マネジメントするとともに、職員間の「差」を解消することも重要だと考えます。

文部科学省の令和四年度概算要求を見ますと、高学年教科担任制や三十五人学級の推進、CTBシステムの機能改善・拡充等、今後の動向が把握できます。先を見据えながら、目の前の子どもたちの今と将来の笑顔、職員の笑顔のために、校長も笑顔で取り組んでいきたいものです。(上越 南本町小学校)

大会の概要

全連小・石川大会報告(1)

本多 郁代

十月十四日、十五日の両日に開催を予定していた、第七十三回全国連合小学校長会研究協議会石川大会は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、誌上発表での開催となった。本大会の開催に向け、三年以上にわたり準備を進めてこられた石川県小学校長会の皆様の思いや、昨年の第七十二回京都大会、そして今年の第七十三回石川大会が、二年連続で紙上発表となったことを考えると残念である。発表内容を受け、今後の学校経営に生かすとともに、発表から学ばせていただいたことを報告する。

大会主題は「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、副主題は「ふるさとを愛し、主体的・協働的に学び、豊かな未来社会を創る子どもの育成」である。

ここからは、大会一日目の五領域十三分科会の中から、参加予定であったIV危機管理十分科会の危機対応について報告する。

研究課題は「様々な危機への対応と未然防止の体制づくり」、研究の視点は「視点①いじめ・不登校等への適切な対応と体制づくり」と「視点②教職

員の高い危機管理能力の育成と未然防止に向けた組織体制づくり」である。

視点①の発表からは、いじめ防止について「未然防止」「早期発見」「早期対応」「対応力の向上」の四つの視点の取組において、校長の指導性やリーダーシップの必要性と、教職員が安心して職務に専念できる学校組織を築き上げることの重要性が明らかになった。また、視点②の発表からは、様々な危機を想定した研修や訓練を確実に実施すること、さらに教職員の異動等で危機管理体制が弱体化しないように、毎年の確認と見直し、情報共有と共通理解を図ることの必要性が明らかになった。また、危機対応や体制づくりにおいて、今後若手教員が増える中、組織的な人材育成が急務であることも分かった。

危機対応について、学校が対応しなければならぬ事案は多岐にわたる。校長自身が常に危機管理意識を高くもつとともに、教職員及び子どもたち一人一人の危機対応力を高めていくことの重要性を発表から学ばせていただいた。(新潟 青山小学校)

大会の概要

全連小・石川大会報告(2)

西島雅弘

一 はじめに

参加予定であった第一分科会の研究課題は、「創意と活力に満ちた学校経営ビジョンの策定」である。研究課題に基づき、鹿兒島市立桜丘小学校から、紙面で研究が報告された。

二 研究の概要

(一) 題目

「活力ある学校づくりを目指す校長の経営理念と方策」学校経営ビジョンの実現を目指した学校経営の推進」

(二) 研究の内容

教師は、教師としての自覚や責任、子どもを育てる情熱や愛情などを自身自身で逐次育んでいくことが必要であり、それが子どもの成長へとつながっていく。

教師には、「人として」どうあるべきかの視点から、「人間性」(教師としてどうあるべきか)、「社会性」(教師として果たす役割は何か)、「効率性」(成果を出すためにどれくらい費やすか)の三つの資質が必要であり、その資質を培うための方策を追求した。

○ グランドデザインの改善

教師としての自覚と責任、教師として取り組むべきことなどをより明確に想像できるようにした。これにより、

「人間性」、「社会性」が強化される。

○ 校内研修の改善

教師が学びの本質を理解し、子どもの思考を学ぶことを通して、これまでの授業観からの脱却を目指した。授業改善により、子どもの自己肯定感が高まり、よりよい人間関係が築かれる等、生徒指導や学習指導の充実が図られる。これにより、「人間性」「社会性」「効率性」が強化される。

○ 校務分掌編成上の工夫

情報を共有するための連携促進、マンパワーを生み出す適材適所、事務処理時間の確保に取り組んだ。これにより、教師としての自覚や責任、同僚との連携の必要性等、教育をつかさどる者としての意識の高揚(人間性)や時間の有効活用への意識化(効率性)が図られる。

三 おわりに

新たなことを始めるのではなく、今やっていることを「捉え直す」ことが重要である。校長をはじめ、教師自身が取組を意味付けるのである。そうすることで、新たな価値が見出され、教師としての成長が期待できる。

(上越 八千浦小学校)

市都市
指定
郡政
令指
だよ

「教育は未来の希望」の実現を目指して

長岡市三島郡小学校長会

「米百俵のまち」長岡市と、「良寛生誕の地」出雲崎町。長岡市三島郡小学校長会は、長岡市五十五名、出雲崎町一名に総合支援学校と附属長岡小学校の二名がオブザーバー参加し、計五十八名で活動している。

長岡市・出雲崎町両教育委員会及び郡市中学校長会、関係機関との綿密な連携を図り、当郡市の教育課題の解決に向け、教育上の諸問題を研究し、小学校教育の充実を図っている。年間七回の校長会に加え、専門部長・委員長会、研修部・福利部による三回の研修会等、各種事業を展開している。

一 子どもに視点を当てた多彩な研修
未来を担う子どもたちが、希望を抱き、「幸せ」を実感できる学校づくりに向けて、校長の指導力向上を目指した研修を進めている。

今年度、研修部は、新潟大学教育学部教授有川宏幸様を講師に招き、「応用行動分析の理解と活用」について、講演会を開催した。環境のミスマッチに起因する子どもの行動を理解し、行動を変えるために学校運営を見直して、新たな価値を子ども理解から見出すことについて研修を深めた。また、県小

教研学習改善調査研究事業報告会を毎年実施している。協力校からの報告を基に、自校の実態に即した、具体的で実効性ある取組に生かしている。

二 会員の情報共有を図る取組

新型ウイルス禍でも、情報共有の歩みを止めないために、オンラインと長岡市の施設を会場に対面での定例校長会を開催している。学校運営上必要な事項の調査研究・打合せ、会員間の連携等、幅広い分野に渡り、協議を深めている。年間二回発行される「悠親会だより(会報)」では、持続可能な新しい学校の姿「ニューノーマル」を創造する学校経営の在り方について、提言や各校の特色ある教育実践を紹介している。また、日常的な交流がなかなか図れない現状を打破するため、定例校長会の際に座談会を設けたり、共有フォルダ内に新型ウイルス対応シートを作成して活用したりして、情報共有を図る取組を工夫している。

長岡市の「夢づくり教育」、出雲崎町の「夢・感性あふれる教育」は、「教育が子どもたちの未来の希望」となることで実現される。そのために、当小学校長会は、力強く歩みを続けていく。

(神田小学校 田邊輝明)

学校紹介

地域を愛し地域とつながる

子どももの育成

佐渡市立相川小学校

佐渡金銀山の麓に位置する本校は、明治六年創立の歴史と伝統のある児童数七十七名の小規模校である。

一 総合を軸にした「相川学」の取組

学区は昔から歴史と文化の中心であり、江戸時代は鉾山の町として栄えた。本校では、この相川の豊かな自然・歴史・文化を学ぶ教育「相川学」を中心に、地域を愛し地域とつながる子どももの育成を目指している。

(一) もりあげよう！相川のまつり

三年生は、相川に伝わる「宵乃舞」「鉾山祭り」「相川まつり」について、地域の民謡団体から学んでいる。「宵乃舞」では、民謡「相川音頭」を唄ったり踊ったりする。踊りは前年に経験した四年生が三年生に教え、当日は三年生と四年生が一緒に参加している。

(二) 「やわらぎ節」を守ろう！伝えよう！

四年生は、金山に伝わる神事芸能「やわらぎ節」を地域の継承者から学んでいる。

「やわらぎ節」は、金掘り大工が金を掘るときに柔らかい岩盤に打ち当たってほ



しいという願いを込めて唄った労働歌で、金山で働く人々が宴会の席で唄い、祝い唄となったものである。

(三) 唄い・奏で・踊ろう！「佐渡おけさ」

五年生は、民謡「佐渡おけさ」についてその歴史や意味を地域の専門家などから学んでいる。併せて、「地方（じかた）」（三味線、笛、太鼓）、唄、踊りを教わり、子どもだけの演奏を目指している。運動会の全校種目である「全校佐渡おけさ」の演奏も担当する（今年度、ウイルス禍により実施せず）。

二 教科等との関連を図る「相川学」

「相川学」は、生活科や図画工作科など、各教科等とも関連を図りながら取組を進めている。例えば、五年生の図画工作科では、「相川学」とおし捉え直した相川の町を、新たな思いで風景画に描いている。また、一年生の生活科「昔遊び」では、本校で製作した「相川ふるさとカルタ」で遊びながら地域への愛着を深めている。今年度、佐渡金銀山の世界遺産登録国内推薦が期待されている。今後も、「相川学」の学習をおして、地域を愛し地域とつながる子どもを育てていきたい。（本間 智英）

学校紹介

「剣野小ものがたり」の志を

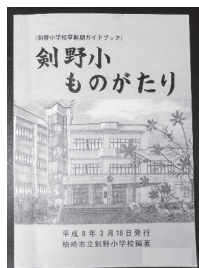
今につなぐ

柏崎市立剣野小学校

剣野小学校は、今年で三十周年を迎える。現在、三百六十一名の子どもが、教育目標「いきいき遊び、いきいき学ぶ子」の下、伸び伸びと過ごしている。

今回、周年事業を進めるにあたり、

有り難かったのは、先人がまとめてくださった「草創期ガイドブック 剣野小ものがたり」の冊子があつたことである。開校の経緯から当時の学校風景まで、百ページを超える内容が子ども用に記載されていた。学校創造への熱意あふれる奮闘記の底流には、「地域の子どもたちに充実した教育を」という一貫した願いが込められている。全校で読書日を設け、在りし日を知り、原点回帰の年としている。



一 愉しむ自然園

校区は、国道八号線沿いに造成された住宅地が広がる。だが、校内のグラウンド奥にはトンボ・ザリガニ水路、雑木林の「みま森の里」、樹木園があり、野鳥の囀りが聞かれ、飛来するカエルガモも人気の恵まれた環境がある。「剣野小ものがたり」を読むと、開校

時に地域・保護者を巻き込み、裏山も含めた大がかりな整備をしてくださったお陰であった。今年も「みま森の里」では、低学年の子どもによる遊びの基地づくりが始まっている。何でも遊びにしてみよう子どもにとって、心くすぐられる環境が提供されている。

二 ウイルス禍での行事復活

ウイルス禍であっても、登下校の見守り等をしてくださるボランティアの方の存在に、子どもは「剣野はいつも変わらない」と安心感を抱く。昨年できなかった活動は対策を立て、少しずつ復活させている。

その中で特に喜ばれたのが、運動会での柏崎郷土民謡「野良三階節」の復活であった。子どもが太鼓をたたきながら返し歌を歌い、地域の有志が生歌と踊りで応援してくださり、運動会の最後を盛り上げた。地域の祭りが軒並み中止になる中でも、曲が流れると踊りは身体が覚えていた。習得まで地道に練習に励んだ、お囃子役の子どもは「来年もやりたい」と意欲を見せる。

引き継がれる伝統の魅力を心に刻む姿は、何とも嬉しいものである。（小林多佳子）



三条市 保内三王山古墳群

白井 敦

一 はじめに

数年前から続く古墳ブーム。全国的に静かに広がっているそうです。

ところで、国内にはどれくらいの数の古墳があるのでしょうか。調べてみるとおよそ十六万基以上。これは全国のコンビニ店舗数の約三倍になります。

当然、県内にも多くの古墳があります。このことは、今から千七百年ほど前の古墳時代前期から、大和王権の力が及んでいた証となります。

今回は、三条市内にある「保内三王山古墳群」をご紹介します。

二 保内三王山古墳群について

(一) 場所

この古墳群は三条市の東部、JR保内駅から徒歩十分ほどの丘陵の尾根沿いにあります。近年遊歩道も整備され、気軽に散策できるようになりました。

(二) 時代と規模

古墳時代前期に造られた前方後円墳、前方後方墳、造出付円墳と、古墳時代後期に造られた円墳、方墳の計十七基の古墳で構成される古墳群です。

(三) 歴史的価値

この古墳群は、昭和五十八年に地元

郷土史研究者から情報を得た新潟大学の甘粕教授らによって確認されました。

当時、信濃川右岸地域には古墳群が確認されておらず、新潟県古代史の空白を埋める大発見でした。

(四) 時代背景

大和王権に認められた三条の豪族は、代々上保内の丘陵に古墳を築きました。築かれた順は、前方後方墳、造出付円墳、前方後円墳と考えられています。

三条は、大和王権の北進の最前線として重要な位置となったため、この地を治める豪族は、大和王権と結び付きを強めていきました。最終的に大和王権有力者の古墳の形である前方後円墳を造ることができたと考えられます。

ちなみに、この地域にある前方後円墳は、西蒲区の菖蒲塚古墳、弥彦村の稲塚古墳と三条市の保内三王山古墳の三基です。これができるのは、四世紀後半の出来事です。

(五) 空白の百年間

繁栄を極めた三条の豪族ですが、前方後円墳が築かれた後、百年間の空白期間があります。古墳時代中期には、保内三王山古墳群に古墳が造られなかったのです。いったい何が起ったのでしょうか。



保内三王山古墳群全体図

(六) 北方進出ルートの変更

古墳時代前期における大和王権の北進メインルートは、日本海から信濃川をさかのぼり、三条を経て、八十里越えから会津に至るルートでした。それが古墳時代中期になると、群馬県から栃木県を通して北進する「東山道ルート」へと変化しました。そのため、三条と大和王権の結び付きも低下し、最新技術がもたらされなくなり、政治や経済の面で大きな影響を受けたと考えられます。空白の百年の原因は、北進ルート変更のためだったのです。

(七) 蘇った古墳群

空白の百年の後、六世紀初めになると、再び保内三王山古墳群に古墳が造られます。小さな円墳や方墳が十四基密集して造られた「群集墳」と呼ばれる形です。そのうちの五号墳からは、須恵器や土師器が出土しています。当

時須恵器は、朝鮮半島から伝えられた最新技術で、畿内で作られた物がこの地にもたらされたようです。なぜ再び三条に光が当たったのでしょうか。

(八) 後方支援地としての三条

「東山道ルート」は変わらず北進の重要ルートでした。しかし、水田開発が可能な信濃川中流域にあり、交通の要であった三条は、後方支援地として注目されました。そのため、最新技術が群馬県から魚沼地方を経て三条にやってくることもなり、再び三条の豪族が力を付けました。六世紀中頃まで続いたようです。

三 終わりに

およそ三百年続いた三条豪族の繁栄。副葬品も豪華で棺から鏡・鉄剣・鉄斧などが出土しています。そのうち、鉄剣や鉄斧は三条の優れた鍛冶技術で復元されています。現在、鉄剣の復元品は出土品と一緒に「三条市歴史民俗資料館」で展示公開されています。一度ご覧になりませんか。

(資料提供 三条市教育委員会)

(三条 保内小学校)

県小学校長会 HPへアクセス



学校経営に役立つ 情報満載